

## 東谷睦子先生の思い出(一)

教えていただいた幸運に感謝して

二十七回生 黒澤 尚

同級生の萩原直大君に「東谷睦子先生の思い出を書いてくれないか」と請われて、書かせていただくことに決意しました。東谷先生に教わったわずか1年ちよつとの期間は私の人生にとつて非常に大きなものであり、これまでも何度も事あるごとに、一度書いて東谷先生への感謝の気持ちを表しておかなければと思いつつもそのままになって心に引つ掛かっていたことです。

私は千里山会の多くの皆様とは違つて、千二は途中参入、途中退出組の一人です。それなのに、萩原君をはじめとする花組の皆さんのご配慮で千里山に加えてもらつています。父親の仕事の転勤で、私は1951年、昭和26年の2年生の夏に福島県の郡山市から千二に転入学しました。2年生の時は田中幸子先生、3年生は隈部先生が担任でした。当時の千里山はまだ開発前

の千里山そのまま、丘あり、竹林あり、桃畑あり、田んぼありの里山(さとやま)の風景で、しかも2年から4年までは小さな千二の分校で、確か1学年3クラスだったと思います。その前在学していた東北・郡山の街中にある大きな小学校からむしろ田舎の小さな小学校に来た感じがありました。しかし、この環境と千二の規模は親しい仲間と先生とで共に遊び、感じ、考え、学ぶという小学生の理想の教育に格好の下地を作っていたと思います。私は4人兄弟の末っ子で、元来引つ込み思案の性格であり、また恐らく、転校当時は東北の方言も気になってべらべらの関西弁についていけないこともあって、2年生、3年生の1年半はお二人の先生には申し訳ないのですが、ほとんど思い出がありません。

そして4年生の4月、クラス替えがあり東谷睦子先生のクラスになりました。最初の日、朝礼時に分校の校庭にある朝礼台の上で東谷先生が左手を腰に、右手に何かパンフレットを手にして生徒に何か注意を与えているおそらく20歳代後半であった凛々しいお姿と、一方で何か恐そうな先生だなどという最初の残像が今でもくつきり心に残っています。その後5年生の夏に、

今度は東京に転校してしまふまでのわずかの間、東谷先生の花組クラスでたくさんの思い出は今でもぎつしり、鮮やかに心に残っています。

確か、5年生の1学期だったと思います。授業の最後の時間に学級会というのでしょうか、その時にいつも活発に発言するA子さんが「B夫君は朝よく遅刻をしてくる。遅刻はいけないことだから皆で注意すべきだ。」というクラスへの問題提起がありました。確かにB夫君は服装もなんだかボタンが取れていたりだらしくなく、授業中もぼーっとしているようなことが多く、いわばクラスの問題児のような存在でした。その後、詳細は忘れましたが生徒間でいろいろな発言があり、どう注意するか、何か罰を与えるべきかといった方向性に進んでいったように思います。その時、「B夫君の家はパン屋さんで、家の仕事を手伝うために朝、牛乳配達をしているのだ。」という生徒の誰かから重要な指摘がなされました。この発言を契機に、生徒にもさまざまな家庭があり、また家庭の事情によつてはやむなく遅刻せざるを得ないような事情もありうるのだ、という方向へ議論が変わり、最後はむしろどうやってB夫君を皆でサポートしてあげられるかといった方向に

向かつていったと記憶しています。当時お金持ちが住んでいた花壇町にお家があったA子さんは勿論、その他の多くの普通の生徒にも想像できなかったB夫君の家庭環境だったのです。その間、東谷先生は黙つて皆の議論を聞いていただけだった記憶しています。東谷先生に教わつて1年間になっていましたが、このような生徒の議論の仕方、考え方が東谷先生が最も教えたかった、身につけてほしかったことだったのではないのかな、と後になって思い出すことです。

その頃の昭和27、8年は太平洋戦争が終わつてまだ10年も経過していない時代です。我々の世代は戦争中の記憶は全くない時代ですが、10年といえば大人の世代にはその思い出や傷跡がまだ癒えていない時代です。人が人を傷つける、殺しあう戦争、そのような愚かなことをどうしたら繰り返させないかという思いがまだ世の中の人々に残っていた時代です。人は社会の中でしか生きられない存在ですが、周りは皆自分とは考え方や育つた環境が異なる他人ばかりです。そのために時に様々な軋轢な人と人の間に生じます。町で生きずりあう他人、学校や会社や組織で出会う他人、家庭の中でさえ配偶者も子どもも本質的には自分とは違う他



人です。そのような他人と傷つけあわずに生きていくには「他人は自分とは違うのだ、いろんな人がいるのだ」という相手の違いや立場を理解して、その存在を尊重する心が原点です。

皆が書いていますが、東谷先生にはよく作文を書かされました。書きなれていないと小学生には（いや現在の私にも）作文は難しいことです。どうしても、どこに行ったら、どうした、こうしたといった行動記録でおしまいになります。そのような作文は読んでも面白くない、心に訴えない、書いたほうにも何にも残らないということになります。東谷先生には題材は家のことでも何でもいいから恥ずかしくがらずに書きなさい、ただし、その時自分が感じたこと、考えたことを付け加えなさいとよく言われました。自分の感情や考えたことを書くことと思うと自分の感情を振り返りながら、考えながら書くことになります。考えることによつて自分を内省し、少しずつ自分を客観視するようになり、自分の考えが深まるようになってきます。勿論、考えて判断がつかないことも多く、そこから正しいことを探す気持ちが生まれてきます。そして、人間として大

事な自立する心ができてくるのだと思います。

毎週のように短い作文を書かされた思い出があり、そのつど、東谷先生が赤ペンで丸や二重丸と感想を付けて返して下さり、その感想が楽しみでだんだん書くことも楽しくなつて、また書くという心境になっていきました。その中でもクラス文集「坂道」（第一号）の作成は最大のイベントでした。文集は作文そのものだけでなく、表と裏表紙には生徒が作った版画（リノリウム版）で上手な生徒の作品を載せるといふ企画もあり、私も力を込めて版画を作ったのですが、残念ながら表紙は平尾君の「坂道」、裏表紙は牧野君の「アトプ」が選ばれて、とても悔しかった思い出があります。そしてクラス全員の作文を東谷先生が全部ご自分でガリ版に切り、それを皆でワイワイ言いながら刷ったのも楽しい思い出です。しかし、全員の作文を添削し、さらに全部をガリ版に切ることをお一人で行うだけでも大変な作業で、生徒一人一人への熱い思いなしにはやれないことだったろうと今になって思います。

このように版画もそうですが、東谷先生は生徒に様々な刺激や機会を与えて、生徒にいろいろな興味を持たせて、それぞれの生徒の長所を引き出そうと努力、

工夫されていたように思います。当時、クラスで私の楽しみだった一つは、天気の良い日など時々急に、予定されていた授業を中止して「自然学級」とでもいうのでしょうか、先生と皆が学校を出て、千里山の田んぼのあぜ道や里山を一緒にめぐつて、道すがら植物や畑や自然のことなどを教えてもらい、話しながら歩いたことです。小さな遠足のような気分が本当に楽しい授業でした。しかし、今の小学校で先生がこれをやったらたちまち「変わった危険な先生」ということで教育委員会や父兄から批判されるようなことでしょうか。これに刺激されたのでしょうか、私は当時、自分の家の庭で稲と麦を苗から育てた思い出があります。本校から千里山の駅までの間の左手に田んぼがあり、植わつてそろそろ育ちかけた稲を見て、どうしても自分で育ててみたくなり、田んぼから稲をこぼし、東引き抜きました。さすが電車で帰るのはまずいと思い、家のあちと作った小さな池があり、その脇に田んぼを作つて水を絶やさないように育てました。これはその前年にやはり学校の帰りに麦束を少し引き抜いて庭で育て、見ようになねで麦踏みまでして実がなるまで栽培した

経験が昂じた結果だったと思います。これも当時、作文に書いたような記憶があります。その夏、稲がかなり育つたところで残念ながら東京へ転校となり、お米を収穫するところまではいきませんでした。千二に近所の農家から「イネやムギを引き抜く生徒がいる」との苦情がなかったかどうか、当時とても気になっていました。

東谷先生は4年生の秋のころ一時お体を悪くされて2ヶ月間（？）くらい学校をお休みになったことがあります。恐らく、生徒の作文添削や授業の準備等で寝る暇もないくらいお忙しく、そのご無理が響いたのだと思います。代わりに教頭先生が引き継いでくださったのですが、東谷先生の生き生きした授業に慣れていた生徒は、かなりお年を召された（と当時感じた、でも50歳半ば？）教頭先生の普通の授業はありきたりで面白くなく、皆クシユンとなつて東谷先生が早く治つてまた教えてほしいと願っていました。そこで、代わる代わる竹園町の先生のお宅にお見舞いと称して、先生の顔を見に、その間起こったことを話して、そして先生のお話を聞きに行きました。このように、第一印象では恐く感じた先生ですが、しばらくすると生徒

の皆にとつて、本当の母や姉のようにいつも一緒にそばにいて欲しいとても大事な存在になっていました。

残念ながら、私は5年生半ばで東京へ転校となりました。しまい、千二の東谷先生とはわずか1年間と1学期だけの関係です。それでも、まだまだ書きたい千二と千里山の思い出が一杯あります。分校から本校に行く際に、近道の裏山を通って行く道中の楽しさ、宅地造成が始まったころのできた崖を先のA子さんなどと滑り下りて遊んだ記憶、音楽の先生に対して黒板消しを入口に挟んでおいたずらや、2階の教室からバケツの水を下に投げるいたずらなどをして学級会で指摘され、泣きながら反省の弁を述べさせられた苦い思い出、当時起こったビキニのアメリカの水爆実験で死の灰を浴びた第五福竜丸事件の新聞記事を必死で読んでガリ版刷りの学級新聞に書いたこと、等々が今でも生き生きと思ひ出されます。このわずか1年足らずの東谷先生の下での期間は小、中、高校の学校生活を通じて最も鮮やかに心に残っている本当に楽しく、充実した、もう一度帰ってみたい学校生活でした。

その後、大学を経て社会人になって、そして高齢者に仲間入りした今でも、自分の考え方や人生観は50年

以上前のその時に形成されたと強く意識しています。いま現在でも、世の中ではないじめ、虐待、動機不明の殺人、そしてまた世界各地での民族間や宗教間での争い、虐殺、戦争など他人を人と思わない軋轢が絶えません。

いつも情熱をもって一人一人の生徒に真正面から向かいあい、人間にとって一番大事なことを教えてくださった東谷睦子先生は本当の教育者というのでしょうか。その後、この現代に東谷先生のような方が全国の小学校に沢山おられたらと思うことはいつもあります。東谷睦子先生に教わる機会を得た幸運をなかなか有り難いことと感じ、先生が我々に惜しみなく与えてくださった当時の日々の情熱とご努力に心より感謝いたします。また、それを生んだ千里第二小学校とその環境をはぐくんだ千里山の町と自然にもありますがと言わせてください。本当にありがとうございます。

この「作文」も東谷先生に添削していただけたらなあ、などとタイムスリップしてしまいます。